



伊地知文庫  
文庫20  
199



桑垣殿

神袖抄  
宗教宗卷



や  
やハ  
このハ  
かり  
こう  
いふ  
いう  
い川  
いく  
こ  
ほ  
ぬ

花の色花の末流軽なりけ  
いさよ次やハ初うりれさよま  
花のふふ多きうはいと春の山  
音しりし音ふはおもなり交の色  
花はる河山こうちるほまを掃  
月いふ末流とよこのまはは雨  
秋の色といまういうくつかえそ  
とくしにめめれせは川まきれま  
おれ成るは音中いよくとまは松  
とくに先此糸の花月夜やまは  
花はえつまきふよまきと秋のま  
名の花まきふよまきぬはれ

此外

る  
いつふ  
いうて  
このめ  
下知らハ  
現互の

は

△ 下知事

出よ  
つくせ  
まて

深由は花のこ乃めれまのめ免  
深つくせはまひこの行志れ  
白ひゆくまらふ袖まそ名は梅

あけ

物け尻花ぢ尻花のヨるもま

あま

さうぬまことあまを花とよまのま

め

梅うま成梅うま身にあ朝の尻

あせ

こちま

い月まこちまこちまよあのも

あせ

見よ かまめ月

存く切家近代作例用之陸松秀白内家

と時用四例と

切家流一文字之世の一文字は門

とその一文字とこは他

現五流

一五に取山ふうけとくは

未東流

声なきとぬまう一部公

あし

△ 玄妙く後句と事

松志ら一尾やまよひらん

りや一山やまうかむん

月や一桂やあう隠るん

存りさ尻月やう流らとわうはん

右志不<sup>ら</sup>やの分別<sup>し</sup>きこ<sup>ら</sup>pp内は切字  
之の有<sup>り</sup>理<sup>の</sup>一<sup>の</sup>やの字<sup>所</sup>ん<sup>き</sup>り<sup>ひ</sup>さ<sup>さ</sup>  
又<sup>り</sup>好<sup>字</sup>入<sup>し</sup>ても<sup>や</sup>と<sup>切</sup>り<sup>し</sup>ても<sup>日</sup>さ<sup>ぬ</sup>の  
後<sup>の</sup>也<sup>は</sup>是<sup>も</sup>割<sup>り</sup>く<sup>も</sup>そ<sup>や</sup>の<sup>も</sup>さ<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ず<sup>か</sup>ら<sup>い</sup>  
p一<sup>の</sup>

廿後句も言妙<sup>し</sup>

梅<sup>う</sup>喜<sup>ぶ</sup>小<sup>浦</sup>あ<sup>ぬ</sup>る<sup>も</sup>白<sup>く</sup>ん

是<sup>を</sup>言<sup>妙</sup>流<sup>後</sup>句<sup>の</sup>よ<sup>し</sup>に<sup>は</sup>も<sup>も</sup>切<sup>字</sup>  
切<sup>り</sup>く<sup>も</sup>浦<sup>あ</sup>ぬ<sup>の</sup>字<sup>更</sup>小<sup>言</sup>妙<sup>く</sup>  
門<sup>よ</sup>も<sup>用</sup>い<sup>た</sup>意<sup>が</sup>と<sup>得</sup>る<sup>こ</sup>

△大廻<sup>え</sup>事<sup>一</sup>

あか<sup>く</sup>と<sup>ま</sup>目<sup>は</sup>磨<sup>く</sup>玉<sup>は</sup>流<sup>る</sup>

白<sup>く</sup>ら<sup>い</sup>風<sup>の</sup>な<sup>り</sup>く<sup>秋</sup>名<sup>月</sup>

け切<sup>字</sup>句<sup>を</sup>と<sup>切</sup>れ<sup>後</sup>句<sup>を</sup>と<sup>下</sup>の<sup>分</sup>別<sup>こ</sup>  
あ<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>と<sup>わ</sup>ら<sup>り</sup>と<sup>玉</sup>津<sup>流</sup>と<sup>ま</sup>り<sup>う</sup>の<sup>後</sup>句<sup>を</sup>  
と<sup>下</sup>の<sup>分</sup>別<sup>こ</sup>と<sup>ま</sup>り<sup>う</sup>に<sup>月</sup>と<sup>あり</sup>  
け<sup>の</sup>後<sup>句</sup>を<sup>と</sup>切<sup>れ</sup>

△之<sup>後</sup>切<sup>え</sup>事<sup>一</sup> 之<sup>名</sup>切<sup>と</sup>し<sup>云</sup>

花<sup>い</sup>し<sup>も</sup>柳<sup>は</sup>流<sup>る</sup>と<sup>ま</sup>り<sup>れ</sup>

月<sup>雨</sup>の<sup>流</sup>る<sup>水</sup>

廿後句<sup>の</sup>柳<sup>を</sup>と<sup>切</sup>れ<sup>後</sup>句<sup>を</sup>と<sup>下</sup>の<sup>分</sup>別<sup>こ</sup>  
且<sup>文</sup>字<sup>も</sup>小<sup>の</sup>後<sup>句</sup>の<sup>切</sup>字<sup>と</sup>り<sup>り</sup>又<sup>り</sup>と<sup>な</sup>と  
且<sup>文</sup>字<sup>と</sup>も<sup>小</sup>の<sup>後</sup>句<sup>の</sup>切<sup>字</sup>と<sup>り</sup>り  
そ<sup>う</sup>ら<sup>い</sup>め



のけむい免うらひつめさる洞そら

△切字よなきに字あまはれとしてとよふとせ  
あるりありおさく字あといふ

こりこよ 秀句

△うりよれと字あしてとある事

う くはるりととあ洞中世を捨て

の 里人のよとあうとあまら

よ 又よといふもあらういけふの捨

こりこ

誰神ううらやあまはれ

是はた神うといひてうとあまらゆふまよ  
まらりもいしうら山吹とくらあまらと  
秀句といひけあまらゆふまらといは習也  
いはせもとのとよ秀句白世字入とと  
てしうかともしむる

△哉ようらふまら事

てよりり あり

世をいせりり  
あまら字なり

△うこうひとりハ切字事

△しんまののゆ △とやまもくふ

このゆのまをるは辰小回のいりて

山ことハあまらゆふのよになといえて



廿やの字音と本流系とあつていふや  
やの字音とあつていふやとあつてこの字に  
習ひのり及たつてとあつて音本流系とあ  
たつてえとあつて音本流系とあつて  
いふやあつていふやとあつていふやとあ  
あつていふやとあつていふやとあ

△九やといふ事

曉のあつていふやとあつていふやとあ

庭小けいふやとあつていふやとあ

かりやういふやとあつていふやとあ

是はいふやとあつていふやとあ  
やの字音とあつていふやとあ

△六のやといふ事

東流や 流るるや 吾日也

志加の御や

廿敷やいふやとあつていふやとあ

川流や 山流や 山流や

河流や 漆はく いう山や

廿敷のやとあつていふやとあ

花はくや 月はくや ありや

ふの火はくや

廿やといふやとあ

△七のやと半一

は合のや

又やん老の世は花あもせん

切のや

ちの花やわしにうまきふん

中りのや

ちのへる雪をく庭小目れい

拾のや

かんとしも雪のあふふふ

八のや

今八のやとせうしとほふも

衆のや

おとよやかき寿徳すそむん

すまのや

おのやとあふ徳も人かひて

はくせつ也

又文豪ありりこつめハ口あいのやあり 又つめハ切や  
ハつめハ中れやりりつめハ角れやりり  
又つめハ八のやりり又つめハ衆れやりり  
衆のハ拾やりり

よものや

おとよ

あふ

いものや

おしほ

あらし

世一文字切字也

霜残ん

あとも縁ん

花残ん

世一文字切字也

霜残んをばは推れく秋のく  
あすも縁んをばは細解く 茶むし  
おれとらん  
しつとらん  
いものや

花をえん秋草とお記はま草か  
あしよつたにらひと石田とむつてれと  
あつたいまをえん久と秋草とま草を  
あしよつてのあゆこ

月ごらん 月よいええしちかういせ

△ふてとある押家とく事

を  
ハ  
し  
し  
ぬ  
いしはさな枝とて麻足の枝と  
又よとの根ハのちれ四と  
魚くあかひのわらま  
いほりのよあめといわね  
意しよあかおねん

し

△ふしのしとく事

袖よふそらさる花あか  
志ハくそ人とせし花  
道あふかこそうり  
石よそといひておし又て  
こそあれとあまあし  
他の白りうす九あま  
口傳  
さかきハハの山  
石ハハのこむう  
まら日北ハハの  
石川いつと其物  
あしよつてとある  
あつたいまをえん久と秋草とま草を  
あしよつてのあゆこ

△後白よ 此後由ことかひきき白く事

梅とをくも成をるのみか

水漬く根はあけの野原

石乃白なるふか 那浜外治定し毎白  
ヶ根の後白は流しとハ背之よ由て毎  
せぬものなり

又後白のひらみよりたかひうなるとも  
押入いともひうとくひうとくひうとくひう  
是くしひて毎不昔々能く後白  
吹く味くて背之く事行要なり

△二世のー 此事一あしともしたくとあししゆ

みえー きー ぶー

石は切字あはゆとくこととたともあつゆ

△孤立きー とうあひ

ねまー 山まー さいー

是ハ切字あはゆとく

△未束のー とうあひ

ちまー ぬぬー さまぬー

あまー かしらへー

是切字あはゆ

△下の白てあひしゆ △大庭ハと押してことあひ

蝶のとあはゆあはのゆとく

ねよこほきつる月ハつらそ

おしよめとうり月ハまきそ

石上世乃歌あり

他をこしノ字ヲヨリナ字ヲヤキ

△武蔵夜白舟とてぬれり

後人のよこめと名と云異ナニ

静うそ 女宗母てハのそふ

静うそて 小とめ夜白舟小ハ極ノ舟と

△し祿字遠ひし事

五光ふ

ありしそん物とそやにまうん

いし祿字て母とそや遠りや口らぬハ

有しそん物とそやにまうん  
し祿とらるしつとそんやハつひて  
し祿字もそや遠りや

△収ぬし事

天地もそやハあるやとまのびぬぬ

ケ極よそてはぬとあつちまそく  
あはれ流ちしそやハそやとそり  
こそぬとあつちまそやとそ

△ふのぬし事

道あつちぬ けららぬ

あつちそはけや

花さぬ

押ぬ

ちり糸

△をらんぬとふ

花らぬ きんぬ 月らぬ

如新ぬ ちんぬ

△ひんぬぬとふ

いんぬ おちぬ

如新ぬ 勢はるる いんぬ

△ぬの分別し事

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ

△いんぬぬとふ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

△いんぬぬとふ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

いんぬ

いんぬ ひんぬ ぬぬ

△いひしらんの手

△是こそ紀ちきん相見おらん  
あつらん念たしうー<sup>あつらん</sup>あつらん  
不好もり念の閑人なり

△二字いひしらん

△是こそ紀ちきん相見おらん

△いひしらん

△是こそ紀ちきん相見おらん

△いひしらん

△是こそ紀ちきん相見おらん

△いひしらん

是こそ  
いひしらん

△四字石月とさハ前々

△石と月とさとハ前々

△すとはとさとはとさとは

△すとはとさとはとさとは

△すとはとさとはとさとは

△すとはとさとはとさとは

△すとはとさとはとさとは

△もろふの句しはもろふそは付くく

△はくぬとの句乃時なりりり世にあらはれぬ

下の句しは二文字なくんももかき

△活字流の之半

活字流の之半

この句しはとあり

同くあり

五文字うそはとあり

ころう一白流中にり

急げせて世め

是顔も置て

△見挽留事

てうの係  
カハトメト云ニテ

くすくす川ぬふむゆろ

わき流まう記よふこて  
わし流中流やよぬを各く  
梅の枝一葉も漕はたえぬ  
あはれはるる谷よふあり  
やはらむとてぬうらぬ  
こころれはるる流のそふ  
みささる流とてありむ

もよふく流やよ海生やよ都と

くすくす  
あはれ  
はくぬ  
くすくす  
あはれ  
はくぬ  
くすくす  
あはれ  
はくぬ



己こらん〜〇い〜まぢり

△志のふとりふ句ー

あ〜ろく かくす へめしる

世詞同音おめぢりあり

口人志のふとりふ句ー

ゆーしと又こいーさ

ナ梅のinsanityといはすしり

△つと〜り

△ハと満りは半ー

まよ〜ぬを移のまはしはら

世句おも〜そつろーと〜く〜ら〜い〜

う〜り〜も〜さ〜下〜ぬらゆハか〜と〜よ〜く〜

まよ〜(家)〜け〜ま〜は〜た〜た〜

いふのハ〜とワ〜りー色ハ〜のハ〜は  
か〜と〜と〜押分別

△じふも

す〜も〜もも井の流も〜と〜

小糸糸〜も〜は竹結〜

い〜く〜も〜の〜も〜り

△つと移又比又と〜ら

童又

又な〜と〜を〜け〜つ〜と〜麻はろ

比又

又も〜ぬ〜親と〜あ〜と〜

△成りり程の入をる詞と〜ら

さ〜ら〜り〜お〜お〜ら〜ら〜

△八字付可

くまのよのころりハ誰じ

△皮肉骨法連分

●上座

人とふたに秋あつりあり  
之秋原や薄も風法々々

●内分

くまのよのころり袖あつり  
かまのよのころり骨法のほ

●骨分

氷とくもほろろありあり  
池をくまのよのころり

真草行の連歌

美

川をくまのよのころり

禮をくまのよのころり

公詞のうけ合をくまのよのころり

草

あつりこのまを乃跡あつり

くまのよのころり

強向くまのよのころり

行

秋のうらんと東よをくまのよのころり

園あつり

くまのよのころり

右真草行一巻の因ふて其書

△本分ことしよりかまき分

多し或恨んよとのももなり

世の中ハ深きまじ世の洞とて

分 ねほのうらもあまむむし一のふくと  
福をすれりふた世とはこころ

秋風さしと夜枯れをきくと

ととり之條におし控ふの月ちや

分 けつ心ぢくささう糸川ゆとらちや  
おととてしりりてり月をえん

△本祝連分

少むとと後とと後れおとて

塚のとうせ田のをのへ草のしら

△本秋連分

金との積やつらうけらん

くまぬはけうれともえくまは物ふ

分 ぶらの積の夏よけあやうり  
いらゆれをけいをけりぬふ

切句ま分

田を鶴りくし海からうらのまきさ

千海は松系しうり志ほとちて

△異形通射

のり結らるるをそりもぢくあり  
約よふ草結植糸小鴨ありて

△つけてふし

こぬ秋結がしりたかく袖結あ  
つは結あべを袂のくもれ

△きせよあまふ

せんともち交結のうきし  
あからくきみれふのあやそり

△うきしひてふし

わのまおしりりふぢもいのみあ  
巨はあふしとくに冬のみまて

△あまりてあまふ

又ゆきま波うせのかと  
本結結あまふ結里乃夕あ

△ふふあまふ

ひぐしあふ結おもりん花のあ

分 いうふしそめりとあふけしちあま  
子川結おもりんよのあさしあ

子川人子とらあやあまむ宿の梅

分 赤宿のむあんのあらあやんくつん  
あひい此外ふきこりこはせら

ふし結あまふ

夕顔ツクシやツクシ花ハナはハナ色イロもモふふくく所所 蘇

花のついでに...

みきりみきりありあり本本 一ツ葉と曙葉

みみ川川秋秋ハハ色色もも力力花花もも色色 咲

ああううりり 咲

川川年年やや親親もも私私好好むむををと 哉人

かかくく 哉人

是ハ親鳥のやうに...

昔昔老老業業子子トト云云人人ハハ親親ニニ孝孝ヤヤキキ

ワワシシニニテテ 孝孝ニニ是是ヤヤギギテテ 見見セセララシシ

通

野野やや余余昔昔のの内内海海ううち

ねねののいいくく月月よよかかよよみみ ウタカヒのせい

舌舌のの羽羽衣衣

オラントを...

天文十四年三月分

宗牧判  
宗養判

長慶朝臣

之好修理左大臣長慶

抄書

遠ひ成りては詞之申

おくしは人とははに花咲て

とけし切字・小はつく字なり

老はつくさめも人ともさるま

も切字・とはつく字なり

疾の尾名は梅さうとさえて

かハ切字・とはつく字なり

まのふも人のさるはさる小

も切字・乃ハはさるなり

△ 禾乃句しとほくま

糸をきりしつらまて草の露の葉  
いりまそとふか切ゆりつらまて草とまて  
ふ切

人はいましもさうなふ秋さうま  
よもきしとふか切ゆりつらまてとらまて  
ふ切

△ 治定はらば

雨のさうなはらばとらまて月夜 忠註

△ 七文字曲

花の後は山はさうりつらまて  
つらまてふらまてとらまてとらまて  
ふ切

兼我

兼我

兼我

千葉やふく神

葉をい

たうきんてんのすい

挿の母たき

小所

雨と歌



たて ツリ 下 ち ぶ ぶ ぶ  
さ ツリ 下 ち ぶ ぶ ぶ  
さ ツリ 下 ち ぶ ぶ ぶ  
さ ツリ 下 ち ぶ ぶ ぶ  
さ ツリ 下 ち ぶ ぶ ぶ  
さ ツリ 下 ち ぶ ぶ ぶ  
さ ツリ 下 ち ぶ ぶ ぶ

小所雨と歌

千葉の 神もいませ  
たちもいませ 天ノ戸川  
樋口あけたまへ

